

目次

1	日本型酪農の再構築	6	オールズカレッジ副学長・学生が来日
2	第36回定期総会と派遣留学生報告会の開催	7	アルバータ州視察2008
2	役員一覧	8~ 9	第35回オールズカレッジ派遣留学生からのたより
3	海外農業技術セミナー	10~11	第36回派遣留学生決定
4~ 5	佐藤貢・雪印乳業—酪農学園・アルバータ大学奨学金	12	交流実績一覧
		12	おくやみ
		12	会費・寄付金・助成金

日本型酪農の再構築

北海道アルバータ酪農科学技術交流協会

会長 麻田 信二

(学校法人 酪農学園理事長)



北海道アルバータ酪農科学技術交流協会の交流事業推進につきまして、日頃から皆様には格別のご理解、ご協力をいただき心より厚く御礼申し上げます。

さて、本協会は2008年度も関係者皆様方のご協力をいただきながら、留学生の派遣、海外農業技術セミナーの開催などの事業を予定どおり実施いたしました。

今年度は、英語研修コース3名を2008年4月よりオールズカレッジに派遣いたしました。昨年と同様、英語研修コースはアルバータ大学で4ヶ月間英語を学習、全員が9月よりオールズカレッジの授業に参加しています。2009年度は1名の英語研修コースと酪農研修コース2名の参加が決定しており、4月派遣に向けて予定どおり準備を進めているところです。

海外農業技術セミナーは、2009年2月18日にカナダ・アルバータ州のアル

バータミルクからマイク・サウスウッド ジェネラルマネージャーを招聘し、「コスト高騰時代における酪農新戦略—カナディアン アプローチー」と題して、カナダにおけるクォーター制による酪農経営とコスト高騰下における安定的で永続的な酪農発展を目指した取り組みを詳細にご講演いただきました。2009年度も開催に向けて準備を進めております。開催日および内容が確定次第皆様にご案内いたしますので、多数のご参加をお待ちしております。

2008年は、アメリカの大手証券会社の経営破たんや自動車産業の経営危機に端を発する、百年に一度と称される世界同時経済大不況の嵐が吹き荒れた年でした。世界の冠たる地位を守ってきた日本の自動車産業や電気産業までもが未曾有の大不況の打撃を受け、雇用不安を招き、

いまだ混沌とした回復の兆しの見ない状況が続いております。酪農もいまだ燃料および飼料の高騰の影響は消えず厳しい経営を強いられています。これほど酪農のあり方を考え直す必要に迫られたことはなかったと言えるかもしれません。輸入飼料への依存度を少しでも減らし、自給飼料の利用を高め、さらには食品加工の副産物の飼料利用など、自立した日本酪農を再構築しなければならない時がきました。一方で、今回の大不況は多くの若者が農業に興味を持ち始めるきっかけになっていることも事実であり、その受入体制の整備が急がれるところです。当協会の重要な役割である担い手教育にさまざまな形で取り組み、貢献していきたいと考えております。今後とも一層のご支援とご協力をよろしくお願い申し上げます。

第36回定期総会と派遣留学生報告会の開催

2008年6月27日（金）酪農学園本館において第36回定期総会（2008年度）を開催し、会員、関係者ら21名の方々にご出席いただきました。

定期総会は麻田会長が挨拶を述べ、次いで北海道農政部農政課主幹の田辺利信氏から来賓のご挨拶を頂いた後、以下の議案がそれぞれ承認されました。

第1号議案 2007年度事業報告ならびに収支決算報告について

第2号議案 2008年度事業計画ならびに収支予算案について

第3号議案 役員の補充・選任について

定期総会後には引き続き派遣留学生報告会を行い、2007年度（第34回）

派遣留学生の尾形亜紀さん、三好佐穂さん、赤樺尚哉君が、約1年間にわたる留学体験を、写真を交えて報告しました。（3名の報告書は、2008年7月発行のカナダ・オールズカレッジ派遣留学生報告書に掲載しています）



北海道アルバータ酪農科学技術交流協会 2008年度役員 2008年6月27日現在

役 職	氏 名	所 属	備 考	役 職	氏 名	所 属	備 考
名誉会長	高橋はるみ	北海道	知事	新 増辻 雅博	雪印乳業株式会社 北海道本部	部長	
顧 問	細越 良一	北海道	農政部長		永田 享	酪農学園後援会	常務理事
	矢野 征男	ホクレン農業協同組合連合会	代表理事 会長	岡本 全弘	酪農学園大学酪農学部	学部長	
会 長	麻田 信二	学校法人酪農学園	理事長	林 正信	酪農学園大学獣医学部	学部長	
副 会 長	金川 幹司	学校法人酪農学園	副理事長	山舗 直子	酪農学園大学 環境システム学部	学部長	
	高野瀬忠明	雪印乳業株式会社	代表取締役 社長	小阪 進一	酪農学園大学 酪農学部酪農学科	学科長	
常任理事	干場 信司	酪農学園大学 エクステンションセンター	所長	荒木 和秋	酪農学園大学 酪農学部農業経済学科	学科長	
理 事 事	原田 勇	学校法人酪農学園	学園長	菊地 政則	酪農学園大学 酪農学部食品科学科	学科長	
	仙北富志和	学校法人酪農学園	常務理事	鈴木 忠敏	酪農学園大学 酪農学部食品流通学科	学科長	
	日下 雅順	学校法人酪農学園	常務理事	齋藤 瞭	酪農学園大学 環境システム学部環境 マネジメント学科	学科長	
	谷山 弘行	酪農学園大学・ 酪農学園大学短期大学部	学長	森川 純	酪農学園大学 環境システム学部 地域環境学科	学科長	
	安宅 一夫	酪農学園大学	教授	矢吹 哲夫	酪農学園大学 環境システム学部 生命環境学科	学科長	
	武田 善行	北海道国際農業交流協会	会長	上田 純治	酪農学園大学 短期大学部酪農学科	学科長	
	掛村 博之	雪印種苗株式会社	代表取締役 社長	野村 武	酪農学園大学校友会	会長	
	北 良治	北海道ホルスタイン 農業協同組合	代表理事 組合長	板倉 敏雄	酪農学園大学 短期大学部同窓会	会長	
	長谷川行夫	日本酪農青年研究連盟	委員長	菊池 利治	学校法人酪農学園	監事	
	菅沼 英二	酪農学園大学	名誉教授	佐々木正一	酪農業（北海道標津町）	酪農業	
監 事	金子 正美	酪農学園大学 エクステンションセンター	次長 (国際交流)	松本 勇	酪農業（北海道標津町）	酪農業	
	佐藤 巍	社会福祉法人 北海道いのちの電話	理事長	事務局長 堂地 修	酪農学園大学 酪農学部酪農学科	教授	
	新 下田 雄一	雪印種苗株式会社	CSR室 内部監査担当部長				

海外農業技術セミナー

講師紹介

カナダ・アルバータミルク ジェネラルマネージャー

Alberta Milk, General Manager

マイク・サウスウッド氏

Mr. Mike Southwood

カナダ・サスカチワン大学で動物科学を専攻。カナダ農務省・農産食品省を経てアルバータミルクに奉職。現在、アルバータ州の酪農生産者の代表組織であるカナダ・アルバータミルクのジェネラルマネージャーで、産業振興に関する施策、規制管理、酪農生産に関する研究、新規開発した乳製品の促進販売、消費者に対する栄養教育に関する事業の責任者を務める。

2008年にはアルバータ畜産業開発基金から「産業指導者(Industry Leader)」として表彰されたカナダ酪農業界のトップリーダー。



北海道アルバータ酪農科学技術交流協会(麻田信二会長)主催の海外農業技術セミナーが2月18日、酪農学園大学学生ホールで開かれ、酪農関係者や学生が熱心に講演に聞き入った。今回のセミナーのテーマは「コスト高騰時代における酪農新戦略—カナディアン・アプローチ」。講師を務めたのは、カナダ・アルバータミルクのマイク・サウスウッド氏で、カナダの生乳供給管理システムについて講演した。

セミナーに先立ち、同協会の麻田会長は「わが国では少子化やそのほかの要因で飲用乳の消費が伸び悩んでいるが、コスト高騰時代にある酪農家にとっては価値が上がらなければ経営が成り立たず、いかに消費者の理解を得て、良質で安全な牛乳を供給していくかが重要な課題」と述べるとともに「このセミナーで学んだことを参加者の皆さんができるだけの仕事に反映させていただきたい」とあいさつした。

サウスウッド氏は「例年の科学的な研究発表とは趣が異なるが、私は生産者側の視

点で話したい」と前置きし、講演に移った。講演では、アルバータミルクの組織、コンセプトをはじめ、カナダ酪農全般について詳しく説明し、参加者の関心を集めていた。

サウスウッド氏は「生乳供給管理システムは政治的支援も受け、消費者への適正価格、酪農家への公正な収益、余剰生産の制限などの点で成功した」と強調し、

「すべての酪農関係者の利益につながるように今後も魅力ある牛乳・乳製品を開発し、国内市場の拡大に努力したい」と締めくくった。

質疑応答では、カナダの農家への指導システム、食品安全プログラムの内容、余剰生産対策、新規就農支援プログラムなどについて質問が上がった。

(酪農ジャーナル2009年4月号より一部引用)



写真：カナダ酪農界をリードするマイク・サウスウッド氏

佐藤貢・雪印乳業—酪農学園・アルバータ大学奨学生

佐藤貢・雪印乳業—酪農学園・アルバータ大学奨学生の第2回派遣奨学生として下記の3名が選ばれました。

出発に先立って2008年8月8日（金）に奨学生授与式が行われ、麻田会長から奨学生と奨学生証明書が授与されました。奨学生3名は8月22日（金）に日本を出発し、4週間アルバータ大学で英語研修を受け、9月20日に無事帰国しました。

獣医学部	獣医学科	3年	橋本 幸江	(英語研修)
獣医学部	獣医学科	3年	鈴木 純子	(英語研修)
環境システム学部	地域環境学科	3年	村松 妙子	(英語研修)



写真：後列左より橋本さん、村松さん、鈴木さん
前列左より干場常任理事、麻田会長、浦川事務局員

研修レポート（報告書より抜粋）

酪農学園大学 環境システム学部
地域環境学科 3年
村松 妙子

私がこのプログラムに参加したのは、元々英語が好きだったというのもあります、このプログラムにとても興味をもったからです。日本にいたらできない経験だったからです。



ホスト・ファミリーについて

ホスト・ファミリーには当たりハズレがあるといいますが、私のところはホストマザーがいい人だったので、当たりの方でした。辛かったことといえば、とにかく夕食がひもじかったこと。「お腹すいたよ～」というと、「じゃあシリアルあるから食べなさい。」とか「サンドイッチ勝手に作ったら？」という感じで、かなりの偏食でした。

あと、私は英語があまり話せなかったので、言わされたことをとりあえずYESとその場しのぎでやったことが多々あり、それで後々勘違いされたりして失敗したこともありました。後でとても怒られました。理解するまで頑張った方がいいと思います。でも言いたい事など、前の日の夜などに辞書を使いながら文章を作ったりして、できるだけ話をするようにしていました。

あと、私の場合は、ホストファミリーが、あそこに行こうか？ここに行こう

か？と案を出してはくれていたのですが、結局ほとんどが何も言われないまま、連れて行ってくれませんでした。向こうの人は日本人みたいに律儀にものを進めないので、行きたい所があれば、ちゃんと自分から具体的な日にちや時間の計画と一緒に立てた方がいいと思いました。

授業について

初めの一週間は、一緒に行った酪農生だけでの授業で、少しでもわからないことがあればどんどん質問できたので、とても貴重な時間でした。日本では学ばない、カナダの日常におけることをたくさん学びました。私が特に教えてもらえてよかったと思うのは発音の勉強でした。それは元々カリキュラムに入っていたのですが、私が発音を教えてほしい！と頼んだら、テキストを持ってきました。その日の授業がまるまるつぶれるくらい、ずっとわかるまで熱心に教えてくれました。

その後の週から色々な国の人々との合同の授業が始まりました。初めは一週目の授業が楽しすぎて、ちょっとだけ憂鬱で、発言する機会もかなり減ってしまいました。韓国、中国、タイ、ブラジル、チリ、サウジアラビアと様々な国の人人がたくさんいました。

でもせっかくの機会だったので、英語がわからないながらも頑張ってたくさん話しかけました。すると最後の方ではみんなととても仲良くなれました。週末に同じクラスの他国の人と遊びに行ったりしました。だから、本当に恥ずかしいと思って、そう思っているのは日本人くらいで、頑張って話すか話さないかでクラスが楽しくなるか楽しくなくなるかが、変わると思います。

ロッキー

ロッキー山脈に行くということで、ものすごく過酷な山登りをするのかと思ったらそんなこともなく、観光地用の施設に行って、初



めに乗り物に乗って上まで行き、少し階段をのぼったくらいでした。私たちの時は、ロッキー山脈を少し登ったのですが、天候が悪かったため、あまり景色がよくなかったです。でも、レイク・ルイーズという湖はとにかく綺麗で、水が水色なんです。水の中に含まれている小さい粒子に太陽の光が反射して水色になっているらしいです。これは本当に感動しました。

いつもはホストファミリーのところにいるので、あまり夜遅くまで出歩けなかったのですが、ロッキーに行った時は、ホテルの近くにバーがあり、みんなでお酒を飲んだりと楽しく過ごしました。バーにいた知らない人とも結構話して、ああすごい外人って誰とでも話すなあと少し驚きつつもとても楽しみました。

最後に

私がこの一ヶ月間カナダに行って、なんでこんなに楽しかったんだろうと考えた時に確信をもって言えることは、友達ができたから。日本人だけじゃなくて、日本人以外の友達を作ると、もっと話せるようになりたい！と思います。とりあえず、まずは挨拶からだけでもいいので、どんどん積極的に話しかけることが重要なと思います。

酪農学園大学 獣医学部
獣医学科3年
鈴木 純子

アルバータ大学のあるエドモントンはカナダの西側に位置する都市でアルバータ州の州都です。人口はおよそ75万人。「ザ・フェスティバル・シティ」と呼ばれるほど年間を通してイベント行事があり、北米最大のショッピングモール「WEM」があります。プログラムでWEMを訪れる機会もありましたが、それ以外にも何度も友達と訪れてスケートやボーリングなどを楽しみました（そこ以外に遊ぶ場所がなかったのが本当のところですが）。

ホームステイ先は学校からバスで30分の場所にあり、家からバス停までは結構な距離があり毎日送り迎えをしてもらっていました。バス停まで歩いて行ける距離ではなかったのが不便でしたが、周りは牧草地



でとても静かでいい場所でした。いろいろな鳥も観察できて楽しかったです。ホストファミリーは、子供はもう独立している夫婦でした。

カナダでは、夜バブに入店する時やその他の場面でもIDの提示を求められることがありました。その際、国際学生証を作つておけばよかったと後悔しました。あると便利だと思います。

今回、英語研修ということで大学でも英語の授業を受けてきました。最初の一週間は通常の授業がまだ始まっていなかったので酪農学園の学生三人のみで授業を受

酪農学園大学 獣医学部
獣医学科3年
橋本 幸江

英語をカナダに行って話した初めての人は、アルバータ大学のエクステンションセンターのオフィサーのセバスチャンと、大学生スタッフのヘイムでした。セバスチャンは私たちのスケジュールを管理してくれました。エクステンションセンターの他のオフィサーの人たち（日本語も話せるというマイケル、ロッキーへ引率してくれたマーク）も、他の大学生スタッフのマーティー、ドモニック、ブリアンもみんなジョークが好きでユニークで、たまに困つたりもしたけど、明るくて、英語だけど笑えて楽しかったです。授業で習った先生は、最初の1週間の授業を教えてくれたクリスと、残り3週間をみてくれたエバでした。クリスは笑い方が私のおじさんに似ていて、わかりやすく話してくれるし、褒めて伸ばしてくれるタイプの先生だったので、とても感謝しています。エバの授業は少し真面目で、人数が多いクラスだったので、クリスほどたくさんは関わませんでしたが、間違っている文法には優しく教えてくれ、英語を学ぶ上で何が大切か、それほどないかを教えてくれました。学校のカフェでは、毎日何かを買ってるので、お店のおじさんやお姉さんと顔見知りになってあいさつしたり、1回アイスの味を悩んで悩んで頼んだら、ただでアイスをくれて「Have fun！」と言ってくれたこともあります。実は日本人の大学生との接触が多くて、私たちと同じように夏休みだけのプログラムで、同志社女子の子たちや、千葉大学の子たち、個人で勉強しに來ていた子たちなど、たくさんの日本人の子が



いました。同志社女子と千葉大学の子たちは、プログラムと一緒にスクールバスでWEMへ行ったり、ロック旅行へ行ったりして、同じ時間を過ごすこともありました。エバのクラスで一緒に、韓国人の子が一番多く話せました。韓国は日本と国が近いせいか、お互いの発音が聞き取りやすかったので、簡単な韓国語を教えてもらったり、日本語を教えたりして、すごく楽しかったです。一緒に休日はWEMへ行ってボーリングしたりしました。サウジアラビアの子たちは、授業中にかく発言することが多くて、いわゆる日本人とは全く違うタイプで、やる気に満ちているなあと思い、見習わなければ！と啓発していました。生まれた瞬間からイスラム教徒らしいので、女の子は頭にスカーフを巻いていました。また、9月はラマダンの月らしく、日のあるうちは絶食絶水だそうで、カナダは日が朝7時～夜8時まであるので、かなり大変な取り決めだと思いました。女の子たちは英語のコースを終えたら生物や化学や栄養学のスペシャリストになりたいから、とカナダに家族と来ているようでした。驚いたのは、サウジアラビアでは小学校から大学まで学費は全部国の政府から払われるそうで、生徒はただで学校へ通えるそうです。結婚している女の子も多くて、子供もいる子もいて、驚きました。国によって動物の占める位置、役割が違うことを嫌というほどサウジアラビア人の子た

けました。大学では様々な人種、年齢の人を見かけ、残り三週間のクラスにも日本人の他に韓国人、中国人、トルコ人、サウジアラビア人が在籍していて、各國の文化や考え方を聞くのがとても楽しかったです。ただ、授業は多少アカデミックなもので、期待していたよりもspeakingの機会はありませんでした。listening, speakingを少しでも上達させたいと思ったら、友達やホストファミリーとの会話の機会を作ることが大切だと思いました。



ちに教わりましたが、それでも、「あなたは動物のお医者さんになるんだね、がんばってね」というようなことを言ってくれた子もいて、とてもうれしかったです。

今回語学研修としてカナダに行きましたが、「コミュニケーション能力の向上」を目標として臨みました。カナダの人たちのフレンドリーさにいい意味でつられて、私自身も日本にいるよりフレンドリーになれたと思います。やっぱり、初対面の人たち、ましてや言葉さえ通じないかもしれない人たちと話すというのは私にとってかなり緊張するようになりました。つたない英語ながらも仲良くできた友達、オフィサー、先生たちがいたので、生活するための最低限の英語なら大丈夫だろう！とこの1ヶ月で思う事が出来ました。自信を持つことはとても大事なことだとホストファミリーにも言われました。小さい自信なので、いつなくなってしまうかわからないけど、今回の研修で英語が通じて嬉しいです。英語を学ぶことに対して啓発されたことを忘れないように、これから自分の将来を考えていきたいです。英語にかかる仕事につかなくても、将来海外に住みたいと思わなくとも（実際、カナダに1ヶ月住んでみて、日本のことがやっぱり好きだと実感しました。）、最低限以上の英語を身につけたいと思いました。



オールズカレッジ副学長・学生が来日

オールズカレッジのパトリシア・ビダート副学長と5名の学生が、2008年5月14日（水）から20日（火）までの1週間酪農学園大学と当協会を訪れ、麻田会長による北海道農業についての講義受講や環境GIS研究室、野生動物保護管理学研究所、乳製品製造工場や動物病院の見学などをされました。全員が初めての訪日ということで、北海道開拓の村で見た過日の日本の町並みの様子に興味をもたれ、また大倉山シャンツェや円山動物園、テレビ塔といった札幌の観光名所への訪問も楽しんでいらっしゃいました。離道前日には金川副会长の経営される金川牧場を訪れ、副会长より北海道の酪農現場の生のお話を伺いました。

滞在中ビダード副学長とはオールズカレッジ派遣留学に関する現状や、今後の改善点などについての話し合いの場を数回にわたって設け、さらに充実したプログラム作りに向けた前向きな話し合いをすることができました。

また、2008年4月にカナダから帰国したばかりの2007年度オールズカレッジ派遣留学生の3名（尾形さん、三好さん、赤樺君）とも交流を持つ機会もあり、当協会とオールズカレッジの関係をより深めることのできた訪問でした。



写真：左上／麻田会長による北海道農業についての講義風景
右上／ビダート副学長

中／オールズカレッジ学生

下／金川牧場にて（金川副会长と）



アルバータ州とオールズカレッジ

カナダ西部に位置するアルバータ州は面積661,190m²（日本の全国土の1.75倍）。石油鉱業、そして農業・畜産業を主な産業としています。カナディアンロッキーの雄大な山々や美しい湖、芸術と文化の都・エドモントンやスタンピードなどで有名な活気あふれるカルガリー、3つの世界遺産を有する南部と手つかずの大自然が残る北部など、観光資源も豊富な州です。

このアルバータ州南部に位置するオールズカレッジは1913年創立。学生約1300名、教員約100名を有するアルバータ州最大の農業カレッジです。1~2年間で習得できる農業関係中心の多彩な教育プログラムを提供しており、農業生産、農業ビジネス、園芸、食品、食肉加工など多数の資格習得コースがあります。特にカナダで最も優れた園芸トレーニングセンターを持



ち、実学による技術習得プログラムを提供しており、実学を重んずる酪農学園大学の教育方針とその目指すところが合致し、交流を深めてきました。



アルバータ州視察2008

2008年11月4日(火)～7日(金)

アルバータ大学

1. 農学部

- オールズカレッジ・ビダート副学長とともに訪問。アルバータ大学農学部はかねてより酪農学園大学へ学生派遣を希望しており、副学長から日本での研修成果について報告されました。アルバータ州の学生が海外で研修する場所として、北海道は広い土地で、外国人研修生を受け入れてくれる農家もあり、プログラムが実現可能な理想的な場所であると伝えられました。

2. アルバータ大学インターナショナル

- 佐藤貢・雪印乳業—酪農学園・アルバータ大学奨学生が2年目となり、学生の奨学生の使途について報告。協定の期限は3年目の来年で満了になりますが、これまでどおり何も問題がなければ、継続する方向で進めていくということで合意しました。

オールズカレッジ

1. ロバート・ウィルソン副学長と面会

- 試験的にオールズカレッジの学生5名を酪農学園大学に2週間派遣してよい成果が得られたので、今後はアルバータ大学農学部のジョン・ケネリー博士(2006年度海外農業技術セミナー講師)と共同で学生を派遣してみたいとのことでした。



2. ビダート副学長と面談

- 5月に学生を酪農学園大学へ派遣したことは大成功だったと報告されました。アルバータ州の学生は狭い地域の知識しかないことが多いため、今回の研修を通してオールズカレッジの学生の見聞が広がったとのことです。今後は2、3名の学生を、3ヶ月間ほどの期間で日本へ派遣し、当協会と酪農学園大学の協力を得ながら農業研修を実施してみたいという意向をお持ちです。

- ビダート副学長自身も来日が初めてで、日本にはとてもよい印象と学生派遣が成功する可能性を感じたので、今後は2年に1度の割合で来道したいと言われています。
- 2008年度オールズカレッジ派遣留学生3名(高橋くん、峯藤くん、金井くん)は英語力が高く、チャレンジ精神にも溢れていて、とても優秀であるという評価をいただきました。

3. 2008年5月来道のオールズカレッジ学生と面会

- 日本での体験はどれも新鮮で、特にハイジ牧場見学の際、異国の地で動物とふれあえたことが感慨深く特別な体験だったと報告してくれました。
- 日本の知識があまりなかったものの、2週間の滞在ですっかり北海道が気に入り、新婚旅行は北海道に決めたという学生もいました。

4. オールズカレッジ派遣留学生と面会

高橋雅貴くん、峯藤裕司くん、金井紀暁くん

- アルバータ大学での4ヶ月間の英語研修を終え、オールズカレッジではすでに1ターム授業が終了。3人ともそれぞれすでに取得した単位もあるとのこ

2008年度も、現派遣留学生の状況調査と今後の留学プログラムの拡充を目的に、アルバータ州立大学とオールズカレッジを11月4日(火)から7日(金)の期間で視察訪問しましたのでご報告いたします。

とで、派遣留学生として優秀な成績を修めています。

- 高橋くん、峯藤くんの2人はフットサルのサークルに所属して、それぞれ得点王(峯藤くん)・ファール王(高橋くん)になるなどして活躍しているとのこと。

- 酪農学園大学での専門科目をオールズカレッジでも履修中の金井くんは、「自分のペースで勉強して、留学の目標を達成したい」と目標を語ってくれました。



5. ベル・e ラーニングセンター視察

- オールカレッジが誇るテレビ会議システムとスマートボード(電子黒板)の最新技術で固められた建物。現在はすべてのシステムを駆使している状況ではなく、会議でのみ使用しています。今後はEラーニングシステムを利用した学習コースの提供を実施していく予定だということでした。



第35回オールズカレッジ派遣留学生からのたより

カナダで学んだこと

酪農学園大学 酪農学部 酪農学科3年
高橋 雅貴

カナダに来て10ヶ月が経ちました。この期間は今までの自分の人生の中でもとても濃いものだったと思います。様々な出会いや経験があり英語だけでなく、人間的にも成長できたと思います。



試合後の飲み会

我々のプログラムは初めの4ヶ月間はエドモントンという街でESLという英語の授業を取りそのあとオールズカレッジという大学にうつり、カナディアンと一緒に普通の授業を受けるというものです。

カナダは日本ほど時間に関心がないのか、ESLのプレイスメントテストも予定時間より30分以上経ってから始まりました。またテスト中に先生がサンドイッチを食べていました。日本との違いを目の当たりにした瞬間でした。カナダは移民が多くホストマザーに連れられて友達の方々に会った時もほとんどの方が移民でバイリンガルでした。その中の10歳の子は英語とフランス語とロシア語が喋れると言っていました。英語で苦労している自分はとてもその子のことがうらやましかったです。

最初はESLの先生の言っていることでさえよく理解できなくて、今何をすべき時間なのかもわかりませんでした。しかし、その焦りのせいもあり勉強に励むことができました。そして時間が経つにつれてわかるようになり質問などにも答えられるようになりました。また韓国や台湾の友達と一緒にいたおかげでスピーキングも上達したと思います。

8月の後半オールズカレッジに移って

きました。オールズは噂通り何もないところでほとんどの生徒が週末実家に帰ります。ちゃんとやっていけるか不安でしたが、ルームメイトがとても親切でいろいろ気を使ってくれます。また一緒にフットサルクラブに所属したので仲良くなることができました。そのおかげで楽しく毎日を過ごすことができました。授業はやはり難しく、とても苦労しました。まず教科書は知らない単語ばかりで1ページ訳すのに30分以上かかりました。専門用語も多く辞書に載っていないものが多く出てきました。授業中もESLとは比べ物にならないくらい聞き取りが難しく苦労しました。しかし先生方はとても親切で質問すると丁寧に答えてくれました。そのおかげでなんとか単位を取ることができました。



ESLのクラスメイト

オールズではフットサルクラブに所属しました。クラブのみんなはとても気さくで日本人の自分たちにも普通に話しかけてくれたり飲みに誘ってくれます。他の国人と仲良くなつてこんな風に一緒にスポーツをすることなんて全然想像もしていなかったので不思議な感覚です。しかしやはりうれしいです。

カナダでのこの10ヶ月は特別なものでした。考え方の幅が増え視野が広がったと思います。いろいろな国の人と出会い様々な文化、価値観を学ぶことができました。また日本で普通に生活していたら絶対に会わなかっただろうと思う日本人にも出会うことができました。それも留学の醍醐味だと思います。最初は迷っていましたが今ではカナダに来てよかったですと自信を持って言えます。支えてくれた親にとても感謝しています。

授業について

酪農学園大学 環境システム学部
生命環境学科 3年
金井 紀暁

留学中の授業について話をしたいと思います。まず、日本にいる時と、留学先での生活リズムは違うのではないかと思っている方が多いと思いますが、私の場合、それほど差はありません。確かに、授業数は日本にいる時とは比べ物にならないほど少ないですが、その他の面は殆ど大差ありません。

休日は半日寝て過ごし、平日は授業の時間の前に起床し、朝食を食べて身支度を整えます。そして授業が終わって帰ってくると、授業の予習と復習をする場合もありますが、授業によっては予習、復習が必要ないものもあります。

私はオールズに移る前まで、授業の予習、復習をしても単位修得が難しいのではないかという不安がありました。確かに専門用語が多い授業は、それらを覚えるのが大変です。しかし、それは日本にいても同じことで、要は覚える単語が英語か日本語かの違いだけです。また、先生によっては授業で使ったPPをコンピュータにアップして、生徒が見られるようにしてくれているので、これを有効に使うことが出来れば、それなりに授業内容を理解することも可能です。



光の柱…気温が低いと見られる。空気中の水分に外灯などの光が反射し、柱状になる自然現象

第35回オールズカレッジ派遣留学生からのたより

そして、コンピュータ系の授業は、全く予習、復習が必要ありません。たまに、授業中に与えられた課題が時間内に終わらなかった時に、空き時間に仕上げる程度です。コンピュータ系の授業は単位修得が非常に簡単です。私の場合、予習、復習どころかテスト勉強すらしなくてもAをとることが出来ました。



前回のセメスターで、私は2つ授業を履修しましたが、そのどちらもコンピュータの授業だった上に、毎日それらの授業が交互に入る日程でした。つまり、授業は一日一つしかなかったのです。これは非常に楽なスケジュールで、授業自体も非常に楽でした。しかし、非常に暇になりました。この時、もう一つレクチャーを取っておけば良かったと思っています。

今セメスターは、3つ授業を履修していて、コンピュータ系とレクチャー系を取りました。最初のうちは、結構きつかったですが、慣れてしまえば前回より充実感を感じることが出来ました。また、レクチャーの方は植物病理学なので、専門用語が出てきたので、勉強する時間が出来ました。私は勉強するのが好きではありませんが、部屋に戻ってダラダラしているよりは良い時間だと感じますし、せっかく留学しているのに英語で勉強することが無ければ、それは非常にもったいない事だと思います。

先日、植物病理学のテストが終わったのですが、正直今回は単位習得できている自信があまりありません。病原の名前や症状を覚え、どういった特徴を持っているのか、など輪郭は把握しましたが、テストではもう少し細かく聞かれていたり、おそらく授業中に話として出てきたのであろう、私の知らない単語が出てきたりと、なかなか苦戦させられました。

ただ、先にも言った通り、前セメスターよりも英語で勉強するという時間が多く取れたので、それはそれで良かったと思います。

Nature of Canada

酪農学園大学 環境システム学部
生命環境学科 3年
峯藤 裕司

カナダに来た目的は英語を学ぶこと、そしてカナダの大自然を見る事でした。なので、夏休みや冬休みを使って、友達と一緒に旅行に行きました。夏休み中にはトロントという、カナダで一番人口の多い都市に行きました。ここは高い近代的なビルや、古い歴史的な建物など様々で、見ていているだけで面白かったです。このトロントからバスで数時間のところに、ナイアガラの滝があり、これが今回の旅行の目的でした。ナイアガラの滝はアメリカとの国境に沿っていて、多くの観光客がいました。フェリーみたいな船に乗って、滝のすぐ下の方まで行ったのですが、滝のすぐ近くにはゴミがかなり浮かんでいてショックでした。かなり、水質が悪そうでした。観光スポットになってしまふと、やはり問題が生じてしまうのだと思いました。しかし、目の前で上から下に水が落ちる光景を見るのはとてもすごかったです。



それから、土日祝日を使って、ロッキー山脈にも行きました。エドモントンから車で4~5時間のジャスパー国立公園というところを見てきました。国立公園内は車用に一本道があってそれ以外は自然そのものです。どこを走ってもロッキー山脈が見え、その周りは夏でも雪、氷河が見えます。木はほとんどが針葉樹で密集して生えているように見えました。湖に反射してうつるロッキーはかなりの絶景です。公園内にはいろいろな動物たちが生息しているのですが、シカやバッファローしか見ることができませんでした。熊やエルクなども見ることができるそうです。

冬休みには今回の留学でもっとも思い出に残っている、オーロラ観光に行きました。イエローナイフというオーロラが世界で一番見ることのできる場所だそうです。自分たちは2泊3日で3回のオーロラを見るチャンスがあって、毎日見ることが出来てとてもラッキーでした。しかも、そのうち2日はかなりレベルの高いオーロラを見る事ができました。イエローナイフはかなり北にある場所なので、気温はマイナス30度以下の極寒でした。さらに、風が吹き始めたら、さらに寒く感じます。オーロラを見ていた場所は凍った湖の上で、そこに寝ころがってオーロラがでるのを待つ感じでした。もちろん、とても寒いのですが、写真にあるティーピーというネイティブのテントの中で温まつたりもできるので、楽しむことができました。



このように、カナダでの語学留学を通して、カナダの自然をたくさん見ることができました。夏は暖かく、冬は寒い気候。つねに、乾燥していて湿気とは無縁です。そのため、カナダの森林は山火事によってかなりの被害を受けています。さらに、冬の寒さから目を覚ました虫たちが春先に大発生するため、虫によるダメージも大きく、カナダの経済にも影響を与えているそうです。日本とカナダの自然はかなり異なっていてとても興味深いものでした。多くのことを学べ、見ることができ本当によかったです。もちろん、良いことばかりではありませんが、こういった経験をすることで自分が成長していくのだと思いました。



第36回派遣留学生決定

選考試験

2008年11月15日（土）に第36回（2009年度）派遣留学生選考試験が行われました。適性検査、一般教養、作文、TOEIC（Test of English for International Communications）スコア、面接試験で総合的に判断し、2名を酪農研修コース、1名を英語研修コースに派遣することに決定しました。

出発式

第36回派遣留学生出発式を2009年2月13日（金）に行いました。奨学金が授与された後、麻田会長から激励の言葉を受けました。英語研修コースに参加する甲斐さんは英語も学習に対する熱意を、酪農研修コースに参加する池田さんと佐野さんは英語の習得はもちろんのこと、カナダでの酪農の現場を体験することに対する思いを語ってくれました。



後列左より堂地事務局長、干場常任理事、金子理事
前列左より池田さん、麻田会長、甲斐さん、佐野さん

酪農研修コース | 2名

カナダ留学



酪農学園大学
酪農学部
酪農学科2年

佐野 綾音

私がこの留学プログラムに参加しよう決意したのは、自分がやりたいことがこの留学プログラムにたくさん含まれていたからです。

私は小さい頃から動物が好きで、壮大な牧場に憧れて農業高校に進学しました。高校に通う中で、もっと酪農や畜産について学びたいと思い、酪農学園大学に入学しました。そして高校や大学で農家実習を体験するうちに、海外でファームステイがしたいと思うようになりました。

一方私は中学の頃から英語が苦手でした。英語の授業を聞いても、暗号にしか聞こえず、苦手意識のせいであまり勉強しませんでした。しかし英語は苦手ですが、嫌いなわけではなく、英語で会話ができるようになりたいと思っていました。そのため大学では英語の科目を率先して学んだり、英会話にも参加しましたが、やはりなかなか思うように上達しませんでした。私は、日本人がいて日本語



が通じるという甘えがあり、英語だけで表現しようとしないから上達しないのだと思います。

今回の留学プログラムは、4ヶ月間ファームステイがあり、オールズカレッジで英語や専門科目的授業も受けることができます。また、私は大学でアイスホッケー部に所属しているため、カナダは私にとって憧れの国でもありました。そのためこの留学は私にとって、とても魅力的であり、絶対に自分のためになると確信し、留学を決意しました。

私は4ヶ月のファームステイを通して、日本の肉牛農家とどのような所が異なるのか、美味しいと有名なアルバータ牛がどうやって生産されているのかこの目で確かめたいと思っています。カナダでの生活は本当に英語しか通じないので、そこで奥手になるのではなく、必死に自分を英語で表現することで、語学力

を上達させたいと思います。またNHLの試合を観戦したり、色々な所を観光してカナダを満喫したいです。

私は本当にカナダ留学が楽しみで仕方がありません。カナダに行ったら、時差もあり、語学も文化も違います。その違いを拒否するのではなく、発見して「こういうこともあるんだな」と吸収する。こうして自分の知識や視野を広げていきたいと思っています。カナダ留学は絶対に自分自身の糧となり、将来につながると思います。

最後に今回私が留学するにあたり支援して下さった、北海道アルバータ酪農科学技術交流協会の方々、本当にありがとうございました。帰国後、留学前より見違えるほどスピーチができるよう一生懸命頑張ってきます。



カナダで頑張りたいこと



酪農学園大学
酪農学部
酪農学科 2年

池田 未佳

私のこの留学での抱負は英語力を向上させることです。大学に入るまで私は英語に興味がなく、受験のためだけの英語の勉強をしてきました。将来も英語にふれることはないとどうと、まじめに向き合うこともしませんでした。そんな私を変えたのはとある特別番組です。それは世界で働く多くの青年海外協力隊の特集で、生活水準の低い発展途上国で力強く生きる人々を支える彼らには心動かされました。そしていつか自分も青年海外協力隊の仲間として世界中で活躍したいと思うようになったのです。そのとき私の前に立ちはだかったのは言葉の壁でした。今 の英語力では、活躍するどころか参加することすらできそうにありません。夢の実現に必要な英語を学ぶために、この留学プログラムに参加することを決めました。

それではなぜカナダなのかというと、

カナダは世界的にも有名な環境保護の盛んな国だからです。国全体が自然を大切にし、保護しているので、多くの大自然があるがままの形で残っています。私は環境保護にも興味があるので、是非カナダで最先端の環境保護を学んできたいと思います。



また、カナダでは広大な土地を利用した大規模農場が有名です。牧場が日本のものとは比べ物にならないほど広く、多くの機械を使った運営をしているそうです。飼っている牛の種類も様々で、聞いた話によるとバッファローを飼っている農家もあるとか。二年間酪農を学んできた者としては、このチャンスを逃すわけにはいきません。現地に赴いて、直接大規模農場を目にし、日本と比較したいと思っています。

カナダでは勉学と共に友達作りにも力を入れたいです。やはり、生活を楽しいものにするためには友人は必要不可欠だと

思います。また、他国の友人を作るチャンスなんてそうそうありません。留学後も連絡を取り合い、たまにお互いの国に遊びに行けるような関係を作れたら素敵だと思います。一生付き合えるような友人ができるよう努力したいです。

あちらの生活はきっと楽しいことばかりではないでしょう。つらいことも、苦しいことも、悔しい思いもするかもしれません。ですが、それを乗り越えたとき、きっと私は人間として大きく成長できると信じています。この機会を無駄にせず、いろんなことに挑戦し、自分の人生の宝となるような留学にしたいと思います。

最後にこのようなすばらしいチャンスを与えてくださった北海道アルバータ酪農科学技術交流協会の方々と、留学のために惜しみない協力をしてくれた方々、そして応援してくれた両親に心から感謝したいと思います。



英語研修コース | 1名

なぜカナダで勉強したいのか



酪農学園大学
酪農学部
食品科学科 2年

甲斐 千愛

私がカナダへの留学を決意した理由のひとつは、語学力を身につけたいからです。私は小学生のころから英語が大好きで、ちょうど近所に英会話を教えてくれるネイティブの方がいたこともあって、英会話を習っていました。当然、中学で開始される英語の授業も楽しみにしていました。しかし、中学で習うのは英会話ではなく受験英語でした。文法という言葉はその時私の辞書にはなく、たとえこの動詞が過去完了でなかったとしても意味は通じるにも関わらず、その解答は間違っている、という事実をなかなか認めることができませんでした。そして、それは精神的に幼い私が英語を敬遠し始めるきっかけとしては十分なことでした。今考えると、本当にくだらないことをしましたと思います。何回も挫折してしまった英語の勉強に今度こそ真剣に取り組みたいのです。

また英語を学ぶことによって、言葉の



技術的な面だけでなく、その国で暮らす人々の考え方や、異文化を学びたいと考えています。そして日本との違いを見極め、カナダの人々にも、日本の文化や考え方についての意見を聞いてみたいと思っています。特に、私は宗教について、敬虔な信者から話を聞きたいです。この酪農学園で必修の科目となっている、「キリスト教」の講義を受けるまで、宗教というものを深く考えたことがありませんでした。しかし1年半の講義を通じて、信じる人にとって神様とは何なのか知りたくなりました。私は宗教に関して否定的な意見を持っていますが、カナダで逆の考え方を持った人々と英語で話し合うことによって、自分とは別の考え方を受け入れる柔軟性を持ちたいです。

友達をもう少し早く作れるようになる、というのも、今回の留学の目標です。私は昔から他人への興味が薄く、なかなか集団の中で人との関係を迅速に築けないことがありました。中学校では、2年生から

クラス替えがなかったのですが、みんなと心から楽しく話せるようになったのは3年生の冬になってからでした。他の子と話せるようになるまで、2年近くかかってしまったのです。高校に入ってから少しは早くなりましたが、それでも楽しんで会話できるようになるまで半年以上かかってしまいました。しかし、今回の留学はたった1年しかありません。重ねて言葉の壁というものが最初からあるわけですから、生半可な覚悟では良い友情関係を築くことができません。これを逆手にとって、意識して人とたくさんの関わりを持つ習慣をつければいいと思っています。

最後に、苦労を知らない今の自分に将来への不安を感じています。日々の生活で両親に甘えてしまっていることが多いと感じるので、それらの庇護から離れ、自分ひとりで自分の面倒を見る。という、本来当然のことであることをしっかりとできるのか確認したいと思っています。



交流実績一覧

年 度	教育者・研究者		学 生		酪農青年		計			備 考
	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	合計	
1 1974 昭和49	1				8		9		9	
2 1975 昭和50	1				9	1	10	1	11	
3 1976 昭和51	1				9	1	10	1	11	
4 1977 昭和52	1		1		10	6	12	6	18	学生派遣はアルバータ大学大学院
5 1978 昭和53	1				10	2	11	2	13	
6 1979 昭和54	1	1	1		8	4	10	5	15	学生派遣はアルバータ大学大学院
7 1980 昭和55	1	1			9	3	10	4	14	
8 1981 昭和56	1	1			10	4	11	5	16	
9 1982 昭和57	1		1		10	5	12	5	17	学生派遣はアルバータ大学大学院
10 1983 昭和58	1	2			4	4	5	6	11	
11 1984 昭和59		1			5	2	5	3	8	
12 1985 昭和60		1			7	1	7	2	9	
13 1986 昭和61					7	1	7	1	8	
14 1987 昭和62					8	2	8	2	10	
15 1988 昭和63					9	1	9	1	10	
16 1989 平成元					6		6		6	
17 1990 平成 2			1		10		11		11	学生派遣はオールズカレッジ
18 1991 平成 3			4				4		4	オールズカレッジ
19 1992 平成 4	1	1			1		2	1	3	学生派遣はオールズカレッジ
20 1993 平成 5		7			2		9		9	学生派遣はオールズカレッジ
21 1994 平成 6		2					2		2	オールズカレッジ
22 1995 平成 7		4					4		4	オールズカレッジ
23 1996 平成 8		7			3		10		10	学生派遣はオールズカレッジ
24 1997 平成 9			10		1		11		11	学生派遣はオールズカレッジ6名、 アルバータ大4名
25 1998 平成10			6				6		6	オールズカレッジ
26 1999 平成11		2					2		2	オールズカレッジ
27 2000 平成12		4					4		4	オールズカレッジ
28 2001 平成13		3					3		3	オールズカレッジ
29 2002 平成14		1					1		1	オールズカレッジ
30 2003 平成15		2					2		2	オールズカレッジ
31 2004 平成16		1					1		1	オールズカレッジ
32 2005 平成17		1					1		1	オールズカレッジ
33 2006 平成18			4				4		4	(内1名は英語研修コースで派遣)
34 2007 平成19			3				3		3	オールズカレッジ (内2名は英語研修コースで派遣)
35 2008 平成20			3				3		3	オールズカレッジ (3名を英語研修コースで派遣)
36 2009 平成21			3				3		3	オールズカレッジ (1名を英語研修コースで派遣)
計	10	8	72	0	146	37	228	45	273	
合 計	18		72		183			273		

※酪農青年派遣事業はワーキングビザで渡航、1992年からはワーキングホリデービザで渡航

※2006年学生派遣より、英語研修コースを新設(ファームステイの代わりにアルバータ大学ELPで英語集中研修)

おくやみ

参与 菊池 利治 殿 (享年 68歳)

当協会の役員としてご尽力を賜りました菊池利治氏が、2008年7月6日ご逝去されました。協会一同、謹んで哀悼の意を表します。

会費・寄付金・助成金

誠にありがとうございました。感謝をもってご報告申し上げます。(順不同・敬称略)

五十嵐広司	金井 紀暁	千葉 喜好	矢田 和子	片山 洋子	五十嵐博之
美譽志征彦	松浦 健治	加藤 寛治	高橋 雅貴	中田 和孝	相澤 親
青野 芳樹	長井 信之	井上 保	三好 佐穂	矢田 一則	小松原昇一
吉田恵美子	杉山 久	加藤 源右	黒田 知子	峯藤 裕司	宮川 沙織
永谷 芳晴	安田 元	三浦 有古	涌田 憲一	杉本 和彦	市川 舜

(以上30件)

(社)北海道酪農協会 雪印乳業(株) (社)北海道ホルスタイン農業協同組合 (有)町村農場
(有)金川牧場 雪印種苗(株) (財)酪農学園後援会 学校法人 酪農学園

(以上8件)

2008(平成20)年度会費・寄付金・助成金 合計 1,966,000円
平成21年3月12日現在

Alberta News No.98

発行所 北海道アルバータ酪農科学技術交流協会
〒069-8501 北海道江別市文京台緑町582 酪農学園エクステンションセンター内
TEL(011)386-1292 FAX(011)387-2805 http://www.rakuno.ac.jp/dep26 E-mail:exc-alt@rakuno.ac.jp

発行人 麻田 信二
編集責任者 堂地 修
印刷 制 社会福祉法人 北海道リハビリ-

編集後記

2007年のロバート・ウィルソン副学長の来日に続き、2008年度はオールズカレッジからビダート副学長と学生が当協会を訪問されました。毎年当協会から留学生を派遣していますが、その留学生たちの母国である日本という国、そして北海道がどのようなところなのかを実際に見ていただき、派遣元の当協会と交流を持っていただけることは、大きな意味のあることでした。オールズカレッジとの絆がより深く強くなったことを実感した1年でした。

(篠原)